

書評と紹介

島蘭 進著

『スピリチュアリティの興隆

——新靈性文化とその周辺——』

岩波書店 二〇〇七年一月二十四日刊

四六判 ㄨㄨㄨ三十一四十一七頁 二八〇〇円十税

川 端 亮

一 本書の目的

スピリチュアリティは扱う論者によってその内容に違いがある。まず、本書で島蘭の考えるスピリチュアリティを明らかにしておこう。

スピリチュアリティ（靈性）とは、個々人が聖なるものを経験したり、聖なるものとの関わりを生きたりすること、また人間のそのような働きを指す。それはまた、個々人の生活においていのちの原動力と感じられたり、生きる力の源泉と感じられたりするような経験や能力を指している。

(V頁)

ニューエイジや精神世界と重なる部分が多いが、島蘭は、教団と対立するような新しい運動、文化の側面を強調して、「新靈性運動・文化」と名づけている。伝統宗教の枠に収まらないものを中心に考えているので、キリスト教のスピリチュアリティは周辺に位置し、死にゆく人々のケアやジェンダーからの自己解放運動に見られるスピリチュアリティをその一部（新靈性

文化）と考える。

スピリチュアリティは、消費文化と結びつけて考えざるを得ず、そのために表層的なイメージがぬぐいきれない。本書は、スピリチュアリティを新靈性文化とより幅広く捉えることで、また生活の中で人々が生きていくうえでのスピリチュアリティを個々に描くことで、重層的に、かつ深くまで、描き出すことを目的とする。また、新靈性文化が台頭してくる社会的背景を描くことも重要なポイントだ。

すなわち、スピリチュアルなものが、個人の実存にかかわるほどの深みを持ったものであり、また社会変動の一形態として、うまく描けるか。これが本書のポイントだと思う。

二 構成と内容

本書は、第I部から第III部までと終章の四つの部分から成る。

第I部「新靈性文化をどうとらえるか」では、新靈性文化の輪郭が描かれる。第一章「スピリチュアリティの興隆」は、一九七〇年前後から八〇年代はじめにかけて活躍した先駆者の紹介が中心である。それは、「緑のスピリチュアリティ」山尾三省、「成功のスピリチュアリティ」船井幸雄、「ケアのスピリチュアリティ」柏木哲夫、「自己解放のスピリチュアリティ」田中美津の四人。後二者の紹介が島蘭の考える「新しさ」を知る上では、重要である。

死にゆく人のケアにおいて柏木が強調したのは、人生の危機に瀕したとしても、そのときでも自分が人間として生きていく

あかしを見出す能力で、生きる力、希望、新たなよりどころなどである。神や仏の力を借りてこれらを見出すのは宗教だが、究極的存在ではなく、自分の外の大きなものなどに新たなよりどころを求めた場合が、スピリチュアリテイとなる。ウーマン・リブの田中美津の例は、かなり実存を捉えている。男社会の中で女が女であるためには、男と同じように男社会にでいてもらってほしい。女であり続けるために被る被害からの解放の希求、それも「いのち」からの、生命的欲求。そしてこのような「いのち」をもつ個と個との交感。これがスピリチュアルな痛みであり、スピリチュアルな喜びなのである。

第二章「ニューエイジか新靈性か」では、まず、多くの人がニューエイジと呼ぶのはためらうであろう天河弁財天社を紹介する。日本の精神世界の運動の一面を示すことで、世界的に広く用いられているニューエイジでは捉えきれないことを示し、包括的に、かつ学術的な用語として「新靈性運動・文化 (new spirituality movements and culture)」の妥当性を主張している。

ニューエイジはアメリカの現象を、精神世界は日本の現象を捉える言葉であり、どちらも多様な現象を漠然と指す言葉なので、学術用語としてはなじまない。また、ニューエイジや精神世界という用語では、新しい現象の重要な特徴が見逃されるおそれがある。その特徴は、「新靈性文化は自らが、伝統的な宗教と近代科学や合理主義との双方の欠点を克服した新しい世界観、あるいは新しい運動や文化であると自覚している」。それは「自己変容・自己解放を主題とする運動や文化である」(五

二頁)。集団での実践というよりも個々人の行動なので、ネットワーク化、グローバル化した現代社会では、世界各国のグローバルな情報や文化を取り入れて形成される。したがって、多元的・多中心的な現象となる。そこには宗教のように、救済は含まれていない。すなわち人間の苦難についての強い自覚がなく、人間を遥かに超えた超越的他者もたないのである。

第三章は「新靈性文化と宗教伝統」で、両者の関連を述べる。欧米では新靈性文化はキリスト教から批判を浴びることが多い。ところが日本では批判は少ない。それは、新靈性文化がアニミズムやシャマニズムなどの日本の宗教伝統と重なる部分が大いからであろう。敵対するキリスト教と新靈性文化の関係も現代では相互浸透する面もあることが、近代カトリックの修道生活にまでさかのぼって説明される。

しかしながら、この章で一番興味深いのは、3節の「アイデンティティの未来」である。従来は、人々にアイデンティティを提供するのは、救済宗教と世俗的ヒューマニズムだった。新靈性文化は、新しい第三のアイデンティティの形成の機会を与える。近代的科学や諸制度の発展の結果、救済宗教よりも優位に立った世俗的ヒューマニズムは、近年、衰えを見せるようになる。それは、近代科学の威信と人文的教養の権威が揺らいできたためである。そこで現代社会に適合的な特徴を備えた新靈性文化が台頭する。新靈性文化は、精神／物質の二元論を超えた新しい知となる可能性があり、とくに心理学、医学、教育学の臨床的な場面でその地位を築きつつある。また情報化や個人化が進み、とくに先進国の高学歴の人は、一つの権威に頼るの

書評と紹介

ではなく、多様な情報に接し、高度な知識と情報処理能力でそれらを自由に、柔軟に取捨選択する。「新霊性文化が提供するアイデンティティは権威分散的で、柔軟で、個人中心的な性格をもっており、それがグローバル化や情報化の進む現代社会の住民に好まれると考えられる」(八六頁)。

第II部は、「生きる力の源泉を求めて」で、一九九七年から一九九八年にかけての共同研究「現代日本人の生き方」調査によるインタビュー調査に基づく。対象者を六つの類型に分けて、それぞれに一章を割いている。伝統的教团的な宗教にかかわる宗教性を示そうとした第二章「教团的宗教の枠の中で」と第三章「宗教」を超えて、新霊性文化にかかわる宗教性を示した第四章「漂泊」と第五章「根を下ろして生きる」、それらの枠組みにはまらないようなスピリチュアリティや宗教性である第六章「祈り・死者・道」と第七章「自己実現・自己解放と超越」で、第八章は、これらの章の内容を非常に手際よくまとめている。

第II部では、本書が主題とする「新霊性文化とその周辺」のさらに周辺に関心が向けられる。潜在的な形のスピリチュアリティ、現代日本人の「生きる力の源泉」意識の広がりを描こうとする。それをもっともよく表現しているのが、第六章の本田さんの話だ(一六三―一六七頁)。大学生のときに、育てられたおじの家を出る。経済的に自立するために「リブ・イン・ラブ」という名前のスナックを開き、「愛に生きる」を実践しようとする。「とにかくお店に出てくれば、みんなが来る、ひとりぼっちじゃない、仲間に出会える」。そこでわがものとしたのは、

「そういう強いものとか権力とか、何かわかんないけど「上から来る人」？ たとえば東大野郎の父親とかでも、「東大だから」とか言う人には、絶対屈しないよっていう」権威に屈しない強い自立である。長いものに巻かれるのだから、目先ばかり見るのではなく、「もつと遠くを見て生きていきたい」という生き方になる。「だけど、目の前の障害が邪魔で、遠くが見えない」という難しさがある。そういう彼女の宗教的実践は母親に毎日お参りすることである。「母は、やっぱり憎んでました。」が亡くなったときには、「お葬式のとときとか、人前で涙流すことはなかったんだけど、母の独り暮らしの一軒家に戻って、飲みかけのお湯飲みと座布団を見たとき、私一人で、一生分泣きました」。

第III部は、「グノーシス主義と新霊性文化」。悪の実在性を軽視しているように見える新霊性運動・文化であるが、その源泉のひとつとみなされるグノーシス主義では、悪が強調されており、この両者の関係を問うものである。両者は対照的だがどちらも、現代人にとって魅力的に見える。その理由を明らかにし、にもかかわらず両者が大きく異なることを示すが、この第III部の目的である。

まず第一章「グノーシスは神秘思想か」では、グノーシス主義がエゾテリスムや神秘主義などから影響を受けたかを考えるのだが、その視点を説明するのに、日本の十九世紀初頭の如來教の救済から始められる。ここで示されるのは、人類文化の歴史を巨視的な立場から展望するという視点である。ゲノンやブノワのエゾテリスム研究、フェーヴルの専門的限定、究極の

自己変容・自己完成を目指す思想や実践をエゾテリスムと広く理解するエリアードを紹介し、ハンナ・ヨナスの「反宇宙的二元論」によるグノーシス主義理解などからグノーシス主義の特徴は、「救済の約束とニヒリズムの背中合わせの共存」と捉える。

第二章「グノーシスと現代の物語」では、近年、人気のある桜井亜美の物語から始まる。宮台真司のいう援交する少女たちが選び取る「汚辱にまみれつつ世界を拒絶する」という実存の形式」はグノーシス主義の思考と一致するという入江良平から、ハンナ・ヨナスの「異邦のもの」に結びつける。「異邦のもの」の感性を持つ人は西洋諸国でも次第に増大した。日本でもバブル崩壊後、個人化の急速な浸透、景気の後退とフリーターの増大による孤立感、新しいメディアとサブカルチャーの展開などによって、特に若者の間に「異邦なもの」の誇りと自暴自棄が広まるようになった。新霊性文化がニヒリズムを脱却する可能性と破壊的な作用に陥る可能性の両方をもつことにも触れられている。

第三章「新霊性文化とグノーシス主義」では、チャネラーの元祖、ジェーン・ロバーツを通して語るセスの、悪の実在性を否定する考え方が紹介され、グノーシス主義との違いが強調される。これに影響した要因は、十九世紀後半に起点を持つ北アメリカのニューソートやクリスチャン・サイエンスであり、セスの言う「人間は生まれ変わりを繰り返しながら、次第に霊的な進化を進めていくべき存在だ」という考えには、神智学協会の影響がある。これらの比較から新霊性運動には、「霊的/物

質的という二元によるリアリティの把握、そして秘められた知による真の自己実現という考え方がかなり広く見られ」、悪の捉え方は、グノーシス主義よりも楽観的で、むしろニューソートに近く、「根深い実在性をもつものではなく、容易に克服できるはずのものとする考え方が強い」（二六三頁）とまとめている。

第四章は「グノーシス主義と精神史の現在」。グノーシス主義はコスモスの失墜に深い関わりを持つ一方で、ユングのように、また新霊性文化に広くみられるように、明るい展望を持たば、本来の自己を認識することで、コスモスの回復につながる。

中世の救済宗教から近代に入って、近代合理主義や新宗教、エゾテリスムが、そして一九七〇年代以降、新霊性運動・文化が加わった新たな救済観では、自己実現や自己の癒しに関心は集中し、コスモスの回復は自己の回復となる。現代において、コスモスの失墜や悪の認知などのグノーシス主義の要因が受け入れられているとすれば、これがさらに拡張されて自己の苦しみのみならず、世界の苦しみや他者の痛みに開かれていけば、新しい精神的価値が生じるかもしれないと展望を述べている。

終章「社会の個人化と個人の宗教化——ポストモダン（第二の近代）における再聖化」では、第一部第三章のアイデンティティ論に重なる部分が多い、社会学的な社会変動論の観点から新霊性運動を見ていく章である。

島菌もバウマンやベックのように、社会は全般的に個人化しているとする。個人化によって、社会統合的な宗教は衰退し、

書評と紹介

宗教は個人化する。けれども、その結果は、個人の宗教化をもたらし、社会は再び聖化に向かい、公共宗教が復興すると考える。世俗化論では、宗教は個人化し、その結果、宗教は共同性を失って世俗化すると考えられてきた。島菌の考えのポイントには、宗教の個人化が個人の宗教化に結びつくというところである。

宗教も、その後宗教に代わって人々に共同の価値を提供してきた近代的科学や合理主義も、現代では、厳しい状況に置かれた人々の、実存的な危機を、心の奥深いところを、支えられない。宗教とか、差別からの解放という価値や人権の理念などによりどころを求めなければ、個人個人が、問題や危機に応じ、超越的なもの、スピリチュアルなものを求めざるを得ない。もちろん、それまでは個々人の自由を束縛するものとして宗教を避けていた人でも、厳しい状況に陥れば個人として宗教を選び取る人々もいるだろう。いずれの場合でも個人が宗教性やスピリチュアリティを選択するという個人の宗教化・再聖化が見られるのである。

日本での一九八〇年代以降のネオ・ナショナリズムの興隆、環境問題や脳死・臓器移植などの生命倫理問題、平和運動、NGOによる弱者支援運動に見られるように、現代の公共空間に宗教的な要素が浸透している例は多く、社会の再聖化は確かに進行している。

三 コメント

長い紹介になったが、それだけ本書は密度が濃い内容であ

る。第I部のアイデンティティ論、第II部第六章の新霊性文化の周辺の記述、第三部のグノーシス主義をかなり意外なものとして組み合わせ、比較、論述し、新霊性文化を浮き彫りにする点、終章の宗教の個人化が個人の宗教化に結びつき、社会は再聖化されると論述する点などがとくにおもしろい所であろう。どの部分も読むに値するが、あえて挙げるとすれば、第I部をまず読むべきであろう。ここに主要な論点はほぼ示されている。また、アイデンティティの変容が、社会変動による人々の世界観の変動と結びつけて論じられている点が、評者のように社会学を学んだものからすれば、多くの人に読んでもらいたいところである。

ただ、このような社会変動と結びつくようなスピリチュアリティは、新霊性文化の周辺にしかないのではないかという疑問がないわけではない。本書は随所にさまざまなスピリチュアリティが、その周辺も含めて丁寧に描かれている。とくに印象的なものは、第I部ウーマン・リブの田中美津、第II部第六章の「リブ・イン・ラブ」の本田さんのほか、本田さんに続く、フリピンから日本の農村に嫁いだ今井ナンシーさんの話（一六八一―一七〇頁）、第I部で触れられる大阪釜ヶ崎で宣教にあたったカトリックの本田哲郎神父の話（七六一―七八頁）などである。このような具体的な記述を積み重ねることがスピリチュアリティの重層性を際立たせるものであり、これらの記述を第I部や終章と結びつけることで、スピリチュアリティ、あるいはその周辺が個人の生き方、実存に関わる深いものであることが、十分に読みとれる。しかしこれらは、一般的に思われてい

るスピリチュアリティよりは周辺部分であり、スピリチュアリティや新霊性文化の中心的事例において重層性や深みが読みとれない。たとえば、新しいスピリチュアリティ、新霊性文化に関わる宗教性を描こうとする第II部第四章、第五章でそのようなものがあまり感じられない気がするのである。確かに、島蘭による要約や解説の文章は、それをうまく補っていると評価することもできよう。だが、インタビューの引用文からは直接感じられる部分が少ない。これは、インタビューの問題なのか、インタビュアーの問題なのか、二時間から四時間のインタビューを四―六千字に要約したものに基づく記述だからなのか。おそらく、当初の目的の『現代人の生のゆくえ』は目的に添ってうまく描けたが、同じようではあるが、構成の違うスピリチュアリティの本書の中におくと、そのやり方がうまく全体の中で機能しないのではないか。つまり、一つのインタビューを二次的に利用した本書と一次的な『現代人の生のゆくえ』を讀み比べてインタビューの効果の違いを考察するのも、ここでは詳述できないが、社会調査法としては検討に値するおもしろいテーマである。

本書に欠点がないわけではない。しかし、それらはことごとく本書の中で指摘されている。第II部での「これらの人たちが現代日本人のスピリチュアリティのある種の典型であるなどということはとてもできない。」「ある種のパターンに押し込みにすぎない。こうしたパターンにあてはまらない人たちの事例を参考にしながら、もっと豊かな考察が展開できる日の来ることを願っている」(一九九頁)とか、第III部の「このような巨

視的な立場からの宗教思想の比較は、個々の思想をその特定の文脈の中で精緻に位置づけようとする試みに対置すると、まことに危ういものと見えることだろう」(二二三頁)。また、あとがきにあるように、「新霊性文化が全体としてどのような社会的機能をもつのか」は、「終章ではおおよその見通しを示しているが、正面からは論じていない」。さらに「新霊性文化について欧米で、あるいは日本でなされてきた宗教社会的な研究にもあまりふれていない」(三一一頁)といった点が挙げられる。

しかしながら本書全体としては、社会変動論的なマクロな観点、インタビューによるミクロな観点、時空を超えた巨視的な比較という切り口で、他の研究者では示せないさまざまな側面が示された島蘭独自の新霊性文化についての研究、あるいは現時点での集大成といえるだろう。スピリチュアリティ研究者はもちろんのこと、とくに宗教社会学を学ぶものにとっては必読の書であり、私たちは本書から宗教をテーマにいかにかに社会学するかを学び、宗教社会学を豊饒にしていかなければならない。